

RISEISHA

RISEISHA

RISEISHA
ANNIVERSARY
2022

risei+trip

RISEISHA *vol.*
11



特集

日本スポーツと
英語の新時代

日本スポーツと英語の新時代

来春新設される「スポーツ外国語学科」のイベントに、リーチマイケル選手が来場。学科長となる日本代表通訳の佐藤秀典氏、スポーツライターの生島淳氏の三人が、「スポーツと英語」の現状を語りあった。



photographs by Naohiro Kurashina



(写真右)12月22日に行われたトークイベント。学生、保護者、マスコミ関係者を含めて約250人が参加した(左上)スポーツ界に英語を話せる人材がいかに求められているか熱弁するリーチ選手(左下)同日に行われた記者会見で、新学科のカリキュラムについても詳しく発表された

生島 今年のラグビーワールドカップを取材していた時、とある記者会見でトラブルがありました。通訳の人がスポーツ専門の人ではなく、ラグビー用語が全然わからないので、訳せないんです。例えば得点の「トライ」を、「試みる」と訳したり。

佐藤 教科書通りの英語が話せても、スポーツの現場では通用しない人は結構多いですね。

生島 専門用語や独特の言い回し、スラングなどもありますしね。

佐藤 特にスポーツの世界はそうだと思うんですけども、そのスポーツの用語や文化を身体で理解していないと、頭の中にバツと絵が浮かばないんですね。それだと、コミュニケーションが取れない。

リーチ 僕は15歳の時に日本に来ましたが、それまでニュージーランドで勉強していた日本語は全く使えませんでした。

生島 どうですか？

リーチ 教科書で「ですます」の日本語だけ勉強していたからです。日本に来てみるとスラングが多くて、「行こうぜ行こうぜ」って言われても、わからなかったです(笑)。

「英語はしゃべれるのか？」

生島 「行きましょう」しか知らなかったわけですね。今、スポーツ現場で使える生きた英語を話せる人材はどれくらい求められているのでしょうか。

佐藤 自分は色んな外国人ヘッドコーチの下で通訳として働いてきましたが、たとえばトレーナーやメディカルスタッフをチームで採用する際、色んな履歴書が送られてきますよね。それを見て、「この人は良いけど、英語はしゃべれるのか？」というのが二言目には出てくるんです。

生島 外国人のヘッドコーチやスタッフは今、どんどん増えていきますからね。リーチさんの所属している東芝は、10年前と比べてどうですか？

リーチ 10年前、チームに英語を話せる人は4人だけでした。今は選手を含めて15人はいいます。

佐藤 外国人の監督を置いている日本のトップチームはバスケ、サッカー、バレー、ラグビーで全体の50%弱を占めると言われています。ミーティングが英語で行われることも多いです、トレーニング中、トレーニングの間、ちょっと連れ違った時など、通訳が入れない場面でも細かいコミュニケーションが大事。だから同じ能力なら、英語が話せる方が採用されるんです。実際、ラグビートップリーグのトレーナーは今や英語が話せることがスタンダードになっていますね。

日本の輸出産業にしても良い。

生島 日本のトレーナーやスタッフは、技術的には世界の中でどれくらいレベルなんでしょうか。

リーチ 色んな国と比べても、断トツで優秀です。

佐藤 繊細な技術と、勤勉さがありますからね。どんな外国人コーチもそこは絶賛していました。

生島 日本の輸出産業にしても良いくらいの技術なわけですね。にもかかわらず、言葉ができないことでチャンスが限られてしまっている。

佐藤 そうですね。語学力を身につければ、他との差をつけて世界に羽ばたけると思います。リーチ だから初めてこの学科ができるって聞いた時、本当にワクワクしました。日本の技術を海外で活かせることにもつながるし、学生が海外で得た知識や技術を日本に持ち帰れば、日本のスポーツ界を変えられる。慶正社からスポーツの人材を世界に送り出すために、僕もサポートしていきたいと思っています。